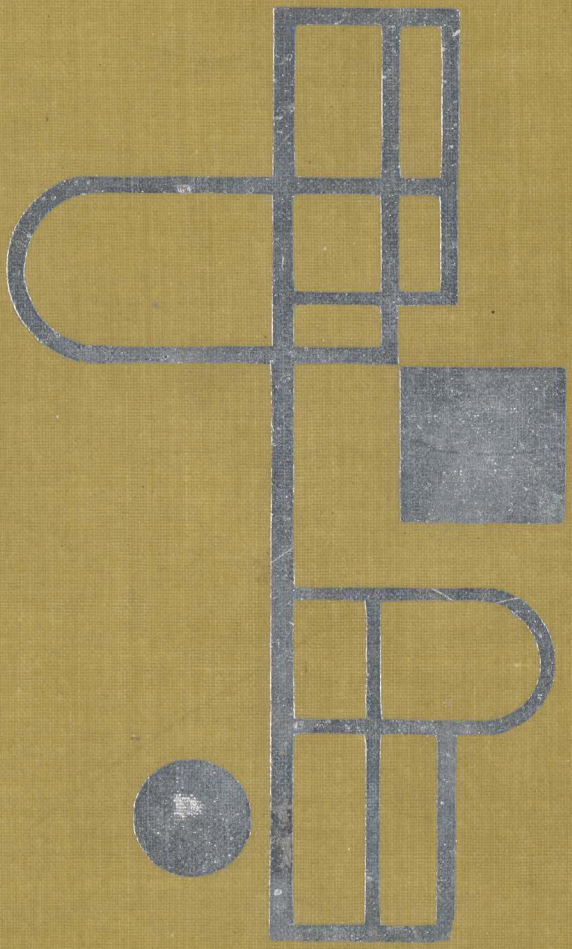
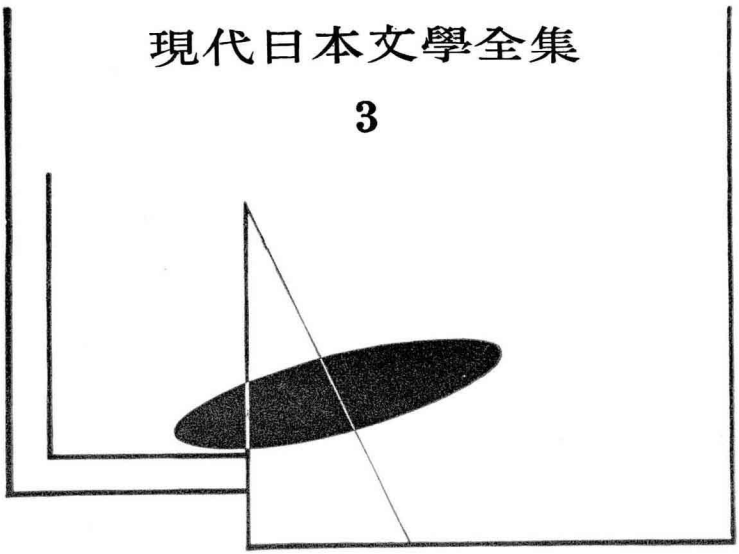


幸田露伴集

現代日本文學全集

3



筑摩書房版

現代日本文學全集 3

幸田露伴集

昭和二十九年五月一日 印刷
昭和二十九年五月五日 發行

著者 幸田露伴（かうだろはん）

發行者 東京都文京區台町九 古田晁

印刷者 東京都青梅市根ケ布三八五 山田一雄

發行所 東京都文京區台町九 筑摩書房
電話小石川（92）五一一・七〇一九
編集部 二〇五七
振替 東京 一六五七六八

本文紙 三菱製紙株式會社
クロース 日本クロス工業株式會社
印刷 株式會社 精興社
製本 有限會社 藤田製本工場

幸田露伴集　目次

突貫紀行……五
酔興記……一〇
風流佛……二〇
地獄溪日記……三九
一口劍……四三
日ぐらし物語……五一
辻淨瑠璃……七五
寢耳鐵砲……九三
いさなとり……一二三
五重塔……二〇三
貧　乏……二三四
夜の雪……二四〇
二日物語……二四六
六十日記……二五七

太郎坊……二六三
ひとよ草……二六七
名和長年……二七八
運命……三〇一
望樹記……三四二
觀畫談……三五七
野道……三六七
幻談……三七〇
連環記……三八〇
露伴先生に關する私記（齋藤茂吉）……四〇八
解説……四一八
年譜……四二三

裝幀　恩地孝四郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

幸田露伴集

突貫紀行

身には疾あり、胸には愁あり、悪因縁は逐へども去らず、未來に樂しき到着點の認めらるゝなく、目前に痛き刺激物あり、慾あれども錢なく、望みあれども緣遠し、よし突貫して此逆境を出でむと決したり。五六枚の衣を賣り、一行李の書を典し、我を愛する人二三にのみ別をつげて忽然出發す。時まさに明治二十年八月二十五日午前九時なり。桃内を過ぐる頃、馬上にて、

きてゐたるものまで脱いで賣りはてぬ
いで試みむはだか道中

小樽に名高きキトに宿りて、夜涼に乘じ市街を散歩するに、七夕祭とやらにて人々各〻自己が故郷の風に從ひ、さま〴〵の形なしたる大行燈小行燈に火を點じ歌ひ囃して巷閭を引廻はせり。町幅一杯ともいふべき龍宮城に擬したる大燈籠の中に幾十の火を點ぜるものなど、火光美しく透きて殊に目ざましく鮮やかなりし。

二十六日、枝幸丸といふに乘りて薄暮岩内港に着きぬ。此港は嘗て騎馬にて一遊せし地なれば、我が思ふ人はありやなしや、我が面を知れる人もあるなれど、海上煙り罩めて浪もおだやかならず、夜の闇きもたよりあしければ、船に留まることとして上陸せず。都鳥に似たる「ごめ」といふ水禽のみ、黑み行く浪の上に暮れ殘りて白く見ゆるに、都鳥も忍ばしく、父母すみ玉ふ方、ふりすてゝ來し方も流石に思はざるにはあらず。海氣は衣を撲つて眠り美ならず、夢魂半夜誰が家をか遶りき。

二十七日正午、舟岩内を發し、午後五時壽都といふ港に着きぬ。此地は此あたりにての泊舟の地なれど、地形妙ならず、市街も物淋しく見ゆ。また夜泊す。

二十七日の夜ともいふべき二十八日の夙くに出港せしが、浪風あらく雲亂れて、後には雨さへ加はりたり。福山卽ち松前と往時は云ひし城下に暫時碇泊しけるに、北海道には珍らしくも流石は舊城下だけありて白壁づくりの家など眸に入る。此地には長壽の人他處に比べて多く、女も此地生れなるは品よくして色麗はしく、心ざま言葉つきも優しき方なるが多きよし、氣候水土の美なればなるべし。上陸して逍遙したきは山々なれど雨に妨げられて舟を出でず。頓てまた吹き來し强き順風に乘じて船此地を發し、暮るゝ頃函館に着き、直ちに上陸して此港のキトに宿りぬ。建築半ばなれども室廣く器物淸くして待遇あしからず、いと心地よし。

二十九日、市中を散歩するにわづか二年餘見ざりしうちに、著しく家列びもよく道路も美しくなり、大町末廣町なんどをさ〴〵東京にも劣るべからず。公園のみは寒氣强きところなれば樹木の勢ひもよからで、山水の眺めはありながら何となく飽かぬ心地すれど、一切の便利は備はりありて商家の繁盛云ふばかり無し。客窓の徒然を慰むるよすがにもと眼にあたりしまゝヂグビー、グランドを、文魁堂とやら云へる舗にて購ふて歸りぬ。午後、我がせし狼藉の行爲のため、憚る筋の人に捕へられてさま〴〵に說諭を加へられたり。されども聊か思ひ定むるよし心中にあれば頑として屈せず、他の好意をば無になして辭して歸るや否や、直ちに三里ほど隔たれる湯の川溫泉といふに到り、而して封書を友人に送り、此地に來れる由を報じ置きぬ。罪あらば罪を得ん、人間の加へ得る罪は何かあらん。事を決する元來雛を截るが如し、多少の痛苦は忍ぶべきのみ。此地の溫泉は今春以來如是大きなる旅館なども設けらるゝやうなりしにて、箱館と相關聯して今後とも盛衰すべき好位置に在り。眺望のこれと指して云ふべきも無けれど、彼市より此地まで或は海濱に沿ひ或は田圃を過ぐる路の興も無きにはあらず、空氣殊に良好なる心地して自然と愉快を感ず。林長館といへるに宿りしが客あしらひも輕薄ならで、いと賴もしく思ひたり。

三十日、淸閑獨り書を讀む。

三十一日、微雨、いよ〳〵讀書に妙なり。

九月一日、館主と共に近き海岸に到りて鰮魚を漁する態を觀る。海濱に濱小屋といふもの、

東京の長家めきて一列に建てられたるを初めて見たり。

二日、無事。

三日、午後箱館に至りキトに一宿す。

四日、初めて耕海入道と號する紀州の人と知る。齡は五十を超えたるなるべけれど矍鑠として殆んと伏波將軍の氣概あり、これより千島に行かんとなり。

五日、一旦湯の川に歸り、引かへして復函館に至り假寓を定めぬ。

六日、無事。

七日、靜坐讀書。

八日、おなじく。

九日、市中を散歩して此地には居るまじき筈の男に行き逢ひたり。何とて父母を捨て流浪せりやと問へば、情婦のためなりと答ふ。歸後獨坐感慨之を久うす。

十日、東京に歸らんと欲すること急なり。されど船にて直航せんには嚢中足らずして興薄く、陸にて行かば苦み多からんが興はあるべし。嚢中不足は同じ事なれど、仙臺には其人無くば已まむ在らば我が金を得べき理ある筋あり、且はいさゝかにても見聞を廣くし經驗を得んには陸行に如くなし。遂に決斷して青森行きの船出づるに投じ、突然此地を後になしぬ。別を訣げなば妨げ多からむを慮り、たゞわづかに一書を友人に遣せるのみ。

十一日午前七時青森に着き、田中某を訪ふ。此行風雅の爲にもあらざれば吟哦に首をひねる事もなく、追手を避けて逃ぐるにもあらざれば駛急と足をひきずるのくるしみもなし。されば まことに彌次郎兵衛の一本立の旅行にて、二本の足をうごかし、三本たらぬ智惠の毛を見聞を廣くなすことの功德にて補はむとする、ふざけたことなり。

十二日午前、田中某に一宴を餞せらるゝまゝ、うごきもえせず飲み耽り、ひるいひ終はりてたちいでぬ。安方町に善知鳥のむかしを忍び、外の濱に南兵衛のおもかげを思ふ。淺蟲といふところまで村々皆磯邊にて、松風の音、岸波の響のみなり。海の中に「ついたて」めきたる巖あり、其外しるすべきことなし。小湊にてやどりぬ。此あたりあさのとりいれにて、いそがしぶる乙女のなまじひに紅染のゆもじしたるもをかしきに、いとかはゆき小女のかね黑々と染ぬるものおほきも、むかしかたぎの殘れるなるべしとおぼしくて奇なり。見るものきくもの味ふ者ふるゝもの、みないぶせし。筍にもるいひを椎の葉のなぞと上品の洒落など云ふところにあらず。淺蟲にいでゆあるよしなれど、みちなかなればいらずありき、途中帽子を失ひたれど購ふべき餘裕なければ、洋服には「うつり」あしけれど手拭にて頰冠りしけるに、犬の吠ゆること甚しければ自ら無冠の太夫と洒落ぬ。旅宿は三浦屋と云ふに定めけるに、衾は堅くして肌に妙ならず、戸は風漏りて夢さめやすし。こし方行末おもひ續けてうつら〳〵と一夜をあかしぬ。

十三日、明けて糠くさき飯ろくにも喰はず、脚半はきて走り出づ。清水川といふ村より又々野邊地まで海岸なり、野邊地の本町といへるは、御影石にやあらん幅三尺斗なるを三四丁の間敷き連ねたるは、如何なる心か知らねど立派なり。戸數は九百斗なり。とある家に入りて書餉たべけるに、櫃の内に蕈あり。椎茸に似て香なく色薄し。されど味のわろからぬまゝ喰ひ盡しけるに、半里程歩むとやがて腹痛むこと大方ならず、涙を浮べて道ばたの草を蓐にすれど、路上坐禪を學ぶにもあらず、却て跋提河の糞迦にちかし。一時斗りにして人より寶丹を貰ひ受けて心地漸くたしかになりぬ。おそろしくして駄洒落もなく七戸に腰折れてやどりけるに、行燈の油は山中なるに魚油にやあらむ臭かりける。ことさら雨ふりいでゝ、秋の夜の旅のあはれもいやまさりければ、

さらぬだに物思ふ秋の夜を長み
いねがてに聞く雨の音かな

食ふものいとをかしく、山中なるに魚のなますは蕈のためしもあれば懼れて手もつけず、椀の中のどぜうの五分切りもかたはら痛きに、とうふのかたさは芋よりとはあまりになさけなかりければ、

鹽辛き浮世のさまか七の戸へ
ほそきどぜうの五分切りの汁

十四日、朝早く立て行く間なく雨しと〳〵ふりいでぬ。きぬ〴〵ならばやらずの雨とも云ふべきに、旅には憂きことのかぎりなり。三本木もゆめ路にすぎて、五戸にて晝飯す。此邊牛馬殊に多し。名物なれど喰ふこともならず、みやげにもならず、うれしからぬものなりと思ひながら、三の戸まで何程の里程かと問ひしに、三里と答へければ、いでや一走りといきせき立て進むに、峠一つありて登ること良〻長けれども盡きず、雨はいよ〳〵強く面をあげがたく、足に出來たる「まめ」遂にやぶれて脚折るゝになんなんたり。並木の松も爰には始皇をなぐさめえずして、ひとりだちの椎はいたづらに藤房のかなしみに似たり。隧道に一やすみす。此時またみちのりを問ふに、さきの答は五十町一里なりけり。とかくして涙ながら三戸につきぬ。床の間に刀掛を置けるは何の爲なるにや、家づくりいとふるびて興あり。此日はじめて鮭を食ふに其味美なり。

十五日、朝、雨氣ありたれども思ひきりて出づ。三の戸、金田一、福岡と來りしが、昨日は晝餉たべはぐりてくるしみければ今日はむすび二ツもらひ來つ、いで食はんとするに臨み玉子うる家あり。價を問へば六厘と云ふ。三つばかり買ひて尙進み行くに、路傍に清水いづるところあり。椀さへ添へたるに、こしかけもあり。草を茵とし石を卓として、谿流の縈囘せる、雲烟の變化するを見ながら食ふもよし、且つ價も廉にして妙なりなぞとよろこびながら、仰いで口中に卵を受くるに、臭鼻を突き味舌を刺す。驚きて吐き出すに腐れたるなり。嗽ぎて嗽げども胸わろし。此度は水の椀にとりて見るにまたおなじ、次もおなじ。是にて二錢種なしとぞなりける。腹はたてども飯ばかり喰ひぬ。

鳥目を種なしにした殘念さ
　うつかり買たくされ卵子に
やす玉子きみもみだれてながるめり
　知りなば惜しき錢をすてむや

是より行く手に名高き浪打峠にかゝる。末の松山を此地といふ説もあり。いづれに行くとも三十里餘りを經ずば海に遇ふことはなり難かるべし。但し貝の化石は湯田といふところよりいづるよしにて處〻に賣る家あり、中〻價安からず。かくてすゝむほどに山路に入りこみて、鬱蒼たる樹、潺湲たる水のほか人にもあはず、暫く道に坐して人の來るを待ち、一ノ戸まで何程あるやと問ふに、十五里計りと答ふ。駭然として夢乎覺乎狐子に驅せらるゝなからむやと思へども、猶勇氣を奮ひてすゝむに、答へし男急に呼びとめて、何方へ行くやと云ふ。不思議に思ひて、一の戸に行くなりと生いらへするに、彼笑つて、噫おのし、まよふて損したり、福岡の橋を渡らねばならずと云ふ。余こゝにおいて愈〻落膽せり。然れど其まゝあるべきにもあらず、日も高ければいそぎて行くに、二時斗にして一の戸驛と云へる標杭にあひぬ。又〻あやしむこと限りなし。ふたゝび貝石うる家の前に出で、價を問ふにいと高ければ、いま〳〵しさのあまり、此蛤一升天保くらゐならば一石も買ふべけれと云へば、亭主それは食はむとにやと問ふ。元よりなりと答ふ。煮るかと云ふに、いや生こそ殊にうましなぞと口より出まかせに饒舌りちらせば、亭主、さらば一升まゐらせむ、食ひ給へと云ふ。其面つきいと眞面目なれば逃げんとしたれども、不圖思ひ付きて、先づ殼をとりて玉はれと答へける。亭主噴飯して、扨〻をかしきことを云ふ人よと云ふ。をかしさはこれのみならず、余は今日二時間斗りにて十五里歩みぬ、又をかしからずやと云へば、亭主、否〻、吾等は老たれども二時間に三十里はあゆむべしと云ふ。段〻聞くに六町一里にて大笑ひとなりぬ。晝めし過ぎて小繋まではもくら〳〵と足引の山路いとなぐさめ難く、暮れてあやしき家にやどりぬ。きのこづくめの膳部にて盡く閉口す。

十六日、朝いと早く暗き内に出で、沼宮内もつゝと拔けて、一里計りにて足をいため、一寸餘りの長さの「まめ」三個できければ、歩みにくきこと此上なけれど、休みもせず、終に澁民の九丁程手前にて水飲み飯したゝめ、涙ぐみて澁民に入りぬ。盛岡まで二十錢といふ車夫あり、北海道の馬より三倍安し。遂にのりて盛岡につきぬ。久しぶりにて女子らしき女子をみる。一體土地の風俗溫和にていやしからず。中學は東京の大學に似たれど、警察署は耶蘇天主堂に似たり。兎も角も青森よりは遙によろしく、戸數

も多かるべし。肴町十三日町賑ひ盛なり、八幡の祭禮とかにて殊更なれば、見物したけれど足の痛さに是非もなし。此日岩手富士を見る、又北上川の源に沼宮内より逢ふ、共に奥州にての名勝なり。

十七日、朝早く起き出でたるに足傷みて立つこと叶はず、心を決して車に乘じて馳せたり。郡山、好地、花卷、黒澤尻、金が崎、水澤、前澤を歷て漸く一ノ關に着す。此日行程二十四里なり。大町なんど相應の賑ひなり。

十八日、朝霧いと深し。未明狐禪寺に到り、岩手丸にて北上を下る。兩岸景色おもしろし。所謂一山飛で一山來るとも云ふべき景にて、眼忙しく心ひまなく、句も詩もなきも口惜しく、淀の川下りの彌次よりは遙かに劣れるも、流石に彌次よりは高き情をもてる故なるべしとは負惜みなり。登米を過ぐる頃、女の兒餅をうりに來る。いくらぞと問へば三文と答ふ。三毛かと問へば唯と云ひ、三厘かといへば又唯と云ふ。尙くどく問へば怫然として、面ふくらかして去る。暫くして石の卷に着す。其より運河に添ふて野蒜に向ひぬ。足はまた腫れ上りて、ひとあし毎に劍をふむごとし。苦しさ耐へがたけれど、錢はなくなる道尙遠し、勤といふ修行、忍と云ふ觀念は此時の入用なりと、齒を切づてすゝむに、頓て草鞋のそこ拔けぬ。小石原にていよいよ堪へ難きに、雨降り來り日暮るゝに亟んたり。已むを得ず負へる靴をとりおろして穿ち歩むに、一ッ家のわらじさげたるを見當り、うれしやと立寄り一ッ求めて十錢札を與ふるに取らず、通用は近日に廢せらるゝ者ゆゑ厭ひ嫌ひて、此村にては通用ならぬよしの斷りも無理ならねど、事情の困難を話してたのむに、いぢわる婆めさらに聞き入れず。なく〳〵買はずに又五六町すぎて、さても旅は悲しき者とおもひしりぬ。鴻雁翔天の翼あれども翊ゝの捷なく、丈夫千里の才あつて里閭に榮少し、十錢時にあはず銅貨にいやしめらるなぞと、むづかしき愚痴の出所は此な者と御氣が付かれたり。漸く或家にて草鞋を買ひえて勇を奮ひ、八時半頃野蒜につきぬ。白魚の子の吸物いとうまし、海の景色も珍らし。

十九日、夜來の大雨漸ゝ勢衰へたるに、今日は待ちに待ちたる松島見んとて勇氣も日頃にましぬ。いでやと毛布深くかぶりて、ゑいさ〳〵と高城にさしかゝれば早や海原も見ゆるに、ひた走りして、遂に五大堂瑞岩寺渡月橋等打めぐりぬ。乘合ひ船にのらんとするに、あやにくに客一人もなし。ぜひなく財布のそこをはたきて船を雇へば、ひきちがへて客一人あり、忌ゝ敷ことかぎりなし。されどおもしろき景色にめでて煩惱も輕きはいとよし。松島の景といへば唯唯、松しまや噫まつしまや〳〵と古人もいひしのみとかや、一ッ〳〵やがてくれけり千松島とつらねし技倆にては知らぬこと、われ〳〵にては鉛筆の一ダース二ダースつかひても此景色をいひ盡し得べしともおもへず。東西南北、前後左右、或は大或は小、高きあり、ひくきあり、みの龜の尾ひきたる如き者、臥したる牛の首あげたる如き者あり、月島星島桂島、踞せるが如きが布袋島なら立てる如きは毘沙門島にや、勝手に舟子が云ひちらす名も相應に多かるべし。松吟庵は閑にして俳士髭を撚るところ、五大堂は寂びて禪僧尻をすゆるによし。況んやまた此時金風淅ゝとして天に亮ゝたる琴聲を聞き、細雨霏ゝとして袂に滴ゝたる翠露のかゝるをや。過る者は送るが如く、來るものは迎ふるに似たり。赤き岸、白き渚あれば、黑き岩、黃なる崖あり。子美太白の才、東坡柳州の筆にあらずは如何むか此光景を捕捉しえん。さてそれより鹽竈神社にまうでゝ、まうこの碑、壺の碑前を過ぎ、芭蕉の辻につき、青葉の名城は日暮れたれば明日の見物となすべき心算にて、知る人の許に行きける。しほがまにてたゞの一錢となりければ、其を神にたてまつりて、

から〳〵とからき浮世の鹽釜で
せんじつめたりふところの中

はらの町にて、

宮城野の萩の餅さへくへぬ身の
はらのへるのを何と仙臺

二十日、朝、曇り。午前九時知る人をたづねしに、言葉の聞きちがへにて、いと知れにくかりければ、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

いそがずはまちがへまじを旅人の
あとよりわかる路次のむだ道

二十一日、此日もまた我が得べき筋の金を得ず、今しばらく待ちてよとの事に逗留と決しける。

二十二日、同じく閑窓讀書の他なし。

二十三日、同じく。

二十四日、同じく。

二十五日、朝、基督教會堂に行きて說教をきく。佛教も此教も人の口より聞けば有難からずと思ひぬ。

二十六日、如何なしけん頭痛烈しくして如何ともしがたし。

二十七日、同じく頭痛す。

二十八日、少許の金と福島までの馬車券とを得ければ、囚循日を費さんよりは苦しくとも出發せんと馬車にて仙臺を立ち、日猶暮れざるに福島に着きぬ。途中白石の町は往時民家の二階立てを禁じありしとかにて、打見たるところ今猶麗然たる家無し。片倉小十郎は面白き制を布きしものかな。福島にて問ひ質すに、郡山より東京までは鐵路既に通じて滊車の往復ある由なり。其乘券の價を問ふに殆んど囊中有るところと相同じければ、今宵此地に宿りて滊車賃を食ひ込み、明日又歩み明後日又歩み、何日までも順送りに滊車へ乘れぬ身とならんよりは、苦しくとも夜を罩めて郡山まで歩み、明日の朝一番にて東京に到らん方極めて妙なり、身には邪熱あり足は猶痛めど、夜行をとらでは以後の苦みいよ〳〵もつて大ならむと、終に草鞋穿きとなりて歩み出しぬ。二本松に至れば、はや夜半ちかくして、市は祭禮のよしにて賑やかなれど、我が心の淋しさ云ふばかりなし。市を出はづる頃より月明らかに前途を照し呉るれど、同伴者も無くて唯一人、町にて買ひたる餅を食ひながら行く心の中いと悲しく、錢あらば〳〵と思ひつゝ漸ゝ進むに、足の疲れはいよ〳〵甚しく、時には犬に取り卷かれ人に誰何せられて、辛くも拂曉郡山に達しけるが、二本松郡山の間にては幾度か憩ひけるに、初めは路の傍の草あるところに腰を休めなどせしも、次には路央に蝙蝠傘を投じて其の上に腰を休むるやうになり、終には大の字をなして天を仰ぎつゝ地上に身を横たへ、額を照らす月光に浴して、他年のたれ死をする時あらば大抵かゝる光景ならんと、悲しき想像なんどを起すやうなりぬ。

二十九日、滊車の中に困悶して僅かに睡り、午後東京に辛くも着きぬ。久しく見ざれば停車場より我が家までの間の景色さへ變りて、愴然たる感いと深く、父上母上の我が思ひ做しにやいたく老い玉ひたる、祖母上の此四五日前より中風とやらに罹り玉へりとて、身動きも得仕給はず病蓐の上に苦しみ居玉へるには、いよ〳〵心も心ならず驚き悲しみ、弟妹等の生長せるばかりにはやゝ嬉しき心地すれど、いたづらに齡のみ長じてよからぬことのみ仕出したる我が、今も猶往時ながらの阿蒙なるに慚愧の情身を責むれば、他を見るにつけ是にすら悲しさ增して言葉も出でず。

（明治二十年八月）

霞

鳶飛んで天にいたれる霞かな
薄霞雉子は一谿越えにけり
和子樣の風船飛んで霞かな
獅子の兒の親を仰げば霞かな
　　巖間の松の花しぶく瀧
ほそ道のこゝにも春のかよふらん
老子霞み牛霞み流沙かすみけり
春霞國のへだてはなかりけり

醉興記

面白く無くて面白く無くて、癇癪が起つて癇癪が起つて、何とも彼とも仕方の無い中の閑を偸むで漸くに綴り成したる露團々は賣れたり、書肆への談判一切を委ね賴み置きたる李山張水（假設の名なり）二人の友は幾十枚の紙幣を手にして我が許に來れり。もとより拙き稿にはあり又名をさへも人に知られぬ一書生が初めての作なれば、賣れむことをば私に覺束無くは自己からも思ひ居たるものゝ、汝が筆に成りしものなど如何で世間に出づべきやと、我が文を金港堂に視せしことの今朝發覺せる際父上の一語に罵り斥けられしには、流石口惜さの波胸の海に立ちて、願はくは價低くとも賣れよかし、悪紙になりとも我が號の印せられて上れよかしと祈り居けるに、五六時間たゝば明治二十二年と曆も改まるべき十二月三十一日の午後になりて我が目下の望みの達し得たるなれば、心地よさ云ふばかり無く、いやどうも年末の折柄御奔走下されて有り難うござりまする、御禮のつもりでと申すでは無けれど忘年の一會を今夜下谷邊で催しませう、松源でも三河屋でも御好み次第、ナニ八百善が靜かで宜かろうとか、宜しい左らば左樣しますから一歩お先へ御出かけ下され、後から迂生はまゐります、と二人を出し遣りて、一枚「ぬのこ」に呉絽羽織、はをるが早いか突と走り出で、上野へと心ざす途中にて財嚢を買ひ煙草を買ひ、サアもう是で澤山だと、極月の晦日なれば何くれと吾が家の忙がはしきをも打忘れて、悦氣滿面酒席に臨みぬ。

李山は高く笑ひ張水は低く語りて我と三人鼎足に坐し、今年を今日限りぞと人々の東西に駈け南北に馳せ行く燈光車聲燦々粼々たる紛如たる市街を俯瞰しながら一杯一杯又一杯、醉の廻るに舌も廻る末は互ひに豪傑がりて、仇めかしき絃歌をこそ厭へ放吟狂舞を何か厭はんとて、李山は鞭聲肅々と樓榭も搖ぐ計りの聲して歌ひ出せば、張水は起つて劍舞を試み、笑傲謔浪已む時を忘るゝ中に夜は更けたり。明日は元日なり、常の日とは違へば夙くより起き出でゝ、初鴉の聲をも聞き初日の出をも拜みたいと思ふに夜を更かし過しては妙ならず、いざ歸らんと「ふところそだち」だけに張水の先づ云ひ出づれば、李山も和すべきありさまなり。

我は興猶盡きざるに二人の歸らんとするを見て面白からず感ずる途端、善く飲む我が友後得（假設の名なり）の此坐にあらば如是はあらじとの想ひ胸に浮びけれど、訪ふとも急には會はるまじく其男の今は隔たり住めるに悵然たること良久しく、言葉も無くて平椀の手酌の酒をぐびり〳〵と飲み居けるが、歡樂極まつて哀情多しとやら云へる通り、今目前の得意極まつて知心の友の居らざるに悲しくなり、嗚呼、一二年來我が落魄して袖に涙をこそかけね腹に不平の煙り絶ゆる間無く渦卷ける折柄、知らざるは然もあるべきが淺からず知れる者すら、街頭相遇ふも面を背け行きて他の酸苦をば蔭での茶話の料と爲すやうなものばかり多かりしに、彼の後得は左まで深き交りを結びたりといふにもあらねど、我管仲の才無きも幸に有ちし鮑叔が情ある友三人四人の其中にて特に優しく我を遇し呉れたる男なり、窮して窮して窮し拔いても薄いながら鬚髭ある面して父母に小遣ひ錢乞ふも悲しく、又大切の朋友に目腐れ金の合力賴むも腹の見らるゝやうにて口惜ければ、たま〳〵妹に貰ふ五十錢壹圓を檢約に儉約し、鐵道馬車に乘りたいところを辛防して僅に煙草を買ふ程なさけ無き頃、ヤア珍らしく來て呉れたのに御馳走は何もないが幸ひ夕河岸の鰯がある、ちと下卑ては居るが此の天麩羅に茄子の揚げ出し、外には出來たところで瓜もみ位だろうが、マア不承して遣つて呉れ玉へといふやうな調子で、厭味の無い待遇を訪ふ度毎にされては、嬉しさ眞に骨に徹し、婦女の情かは知らねど涙さへ腹には溢れて、何時かは此方から倉嶋の正宗、金田の羽がひさきでも持つて行つて、彼の向島の家で飲みたいと思ふ心はありながら左樣も成し得ず濟ます中、酒の悪さうな田舍へ彼は行き、錢が無ければ此上も無く不自由の都に我は殘れば、對酌會話は固よりの事、音信さへも絶え〳〵と

なりぬ。あはれ此地が野州か野州が此地かであるならば直にも尋ね行きて、どうだ、年忘れだ、盛んに飲んで夜を明さうかいと飲みかくべけれど、瀘車の通ずれば近いやうには思ふものゝ佐野といへば三十里餘距りたり、最終列車も既に出たり、今日行つて明日歸るといふ譯にもならねば、已みなん／＼、思ふだけが畫餅なりと是非無さにあきらめて、エースト、これを「おつもり」にしやうと大碗の酒を「ぐいのみ」になし、しばらく舌なめずりしてしろ／＼と四圍を見廻はすに、興味索然何となく面白からず。エエイ、思案分別は賊子のすること、うぢ／＼するは女兒の態、したいことして死んだのが到底死ぬなら一割德だは、よし乃公は佐野へ行かうと、半分は無法になつて終に決定し、さて、これこれの仔細あつて僕は兎に角旅行する、厭で無ければつきあひ玉へ、失敬ながら公等はまだ不潔きはまる武藏野の一抔土外に山青く水遠白き天地あるを更に御存知あるまいが、當世それでは青い／＼、一所に僕と出掛け玉はば野州上州そこら其邊、此懷中のあらん限りを共に遊んで歩行かうに、なんと合點し玉はずや、毎年きまつた雜煮餅、重詰の「おせち」、鱈昆布の吸物、「のし」いたゞかせられて屠蘇を飲ませられるなんといふ馬鹿氣た事を繰りかへしたとて手柄になる譯でもあるまい、行き玉へ／＼、新年旅行がよいでは無いか、ナニこれから歸つて明日出るも何だ彼だとて却つて兎倒が起るに極まつて居る、明朝にならば瀘車が後から必らず來るゆゑ安心して浦和の方へのし／＼と直に此處から出掛けやう、あんまりそれは過激だと、過激も絲瓜もあるものか、人世過激が尤も妙さ、白粉をつけて臙脂を點して髮を結ふて爪をとつて衣服を着換へて新しい下駄を穿いて其後やうやく戸外へ出るとは女の兒のすることさ、頂天立地、どこへ行つても男で候ものが些細なことに關ふものか、家へは途中から郵便を出せばよいさ、いやなら厭ときつぱり云ひ玉へ、强て勸めはせぬけれど、と半分は强迫的に慫慂すれば、二人も遂に其氣になつて、行かう／＼、勘定ッ。

醉のいつまで醒めずにあるべきにもあらず、愛敬提灯の蠟燭幾町の闇を照らし行き得べくもあらねば、上野の公園を出ぬけて王子道へかかりし頃には、寒くもなり氣味悪くもなり又心淋しくもなりて、二人は不承〻〻に我は瘦我慢に黙〻として歩み、放吟高歌の擬勢も拔け面白からず前進せるさま、他より評さば狐に憑れし男どもなるべし。

一月一日の太陽輝き渡りて初烏ほがらかに鳴き、注連繩戰がして曉風心地よく吹けば、三人ともに勇氣を囘復し浦和より瀘車に賴つて、法螺話し、居眠り、あばれ食ひの中に、可美都氣努佐野乃布奈波之登利波奈之於也波左久禮騰和波左可流駕倍といへる古歌を初めとして船橋に名高く、又釜鑄る家の多きに名高き佐野へは着きぬ。今は下野なれども往時は上野なりけん、船橋は上野下野を劃する川にありしや又其枝川にありしや、歌人にあらぬ我等は證して知るべき由も無し。佐野舟橋舊蹟は上野國高崎在佐野郷にあり、往時烏川を船橋にて渡せし其橋を維ぎし複の大樹今にあり、木かげに舟木の觀音の石佛あり、向ふの岸を薄池といふといへる說あり、されば上野の佐野と歌に云へるも解くべく、また中仙道の中のことゆゑ萬葉以來の歌人の口の端に自然多くかゝりしともいふべければ、同郷に在る常世の舊蹟長者屋敷なんどこそ信じ難きものなれ渡しは全く同郷に在りしもの歟。下野國圖には佐野の船橋云〻と佐野の天明近くに書き入れありしもの有りしやに記臆すれど、他に下野ならんと云へるものあるを知らず。

下らぬ詮義より飲む方大事と、直ちに後得を訪ひ、御免なされ御免なされと案內賴めば、年老いたる奴僕樣の男出來りぬ。兎角問答する間に後得も自ら出來りぬ。近くに住めるものなんどの年禮なんどに來しならんと迂濶り出でたる後得の、思ひも寄らぬ我等に押しかけられたるに流石呆れて言葉も無く此方を見詰めて立つたるに、此方は得たりと勢よく、イヨ御芽出たう、相變りませず今年も御懇親を願ひまするとて毒氣を吹掛くれば、ます／＼彼方は驚きて、一體どうした仔細で來た。イヤどうしたのかうしたのどころでは無い、飲んで、醉つて、思ひ出して、ツイと出掛けて、遊びに來た、何にせよ早く飲める家へ案內して呉れ、それから飲んで、それから話して、それから飲んで、それから緩りと話しをして、それから二三日快く遊ばう。ム、分つた、僕について來れば好いさ、と心も輕く

身も輕く其まゝ下駄をチョイ穿きにして、通は斯樣さとスタ〳〵料理兼宿屋へ案内し呉れぬ。

オイ江戸ッ兒は氣が早いぜ、乃公が教へた例の通りに何が無くても先づ酒を出せ、との後得が急かず騷がずの命令に、田舍の者とて譯が分れば運びは早く、酒は忽ち現はれたり。菜漬、燒海苔、鷄卵といふ「おまへだち」より下物も二種三種出たり。夜來の疲れを忘れ果てゝ、我は昨夜の始末より一別後の彼を語り此を語り李山張水をも紹介すれば、彼も丹次郎閒居後の歷史を語り出し、其事彼事と談話は倭文の苧環くりかへし盡きず、往時を今に今に往時を綯りまぜて、主一句客一句、まぜかへし一句、のろけ一句、攻擊一番罵詈一番と終には少し亂るゝまで饒舌り合ひけるが、果は李山傾き張水潰へ、天晴一の剛の者やと自ら任ぜし露伴さへ倒れて其後何も知らず。

夜來の疲勞にぐつすりと醉ひ倒れしが不圖眼覺めて見れば、これはまた何たることぞ、日は既西に沒らんとして、李山張水は腹空しければとて晩飯の膳を扣へたり。後得はと問へば亭婢笑ひながら、御相手が無くなりましたので御歸りになりましたが、御呼び申してゐりませうかといふ。呼べ、呼べ、飯を食ふといふことがあるものか、李張の二君待ち玉へ、何か滋養になるもので少しく飲むのも惡くはあるまい、一體君等は弱卒だから困る、と不平を云ふ片手に面を洗ひ口を淨めなどする中に、後得は笑ひを含みて入り來りぬ。又もやこれに興新まりて例の暴れ飲みとならんとする時、李山は我を顧みて、君と後得先生とは腹中の樽大きくして我と張水とは小さければ、君等の醉はぬに我等は醉ひ、我等の苦むやうなる頃君等は興に入る樣なり、これでは互ひに面白からず、筒茶碗で龜の子が飲み平皿で鶴が吸ふといふ古い話に似たことなれば一方妙なら一方不妙、いつも一坐が手を携へて諸共に陶然として醉鄕に入る場合無し、幸ひ僕が聞き覺えしには鋏心といふ一酒客の此の道理をば嚙みわけて案じ定めし一令あり、そも其一つの例といつぱ、先づ一坐をば見わたして最も酒量の少き人を本位と定めて、其人より五合强きは五合だけ飲み三合强きは三合だけ飲み、又一合だけ僅に强きも一合だけを預め飲み、それより皆〻一齊に小杯をもつて飲み交はし、さしつ抑へつ悠〻と笑ひ語りて歡を盡し、さて最少量者の足れりとするの時をもて其男より次第次第强き者まで杯を收め、宴を撤して禮に終り、茶と煙草とに餘情を語るといふやうな妙式なり、なんと君等も此式に從ひて飲み見玉はぬか、僕等自ら利して云ふばかりでは無ければ後得君も贊し玉へ、といふに張水は一番がけ兩手を擧げて贊したり。後得もまた此奴は妙と云へば、我さへ煙に卷かれて、遣るべし遣るべし、僕から飲まう、僕は甚だ失敬ながら李張二子より三合强い、後得子もまづ其位は無論强いに極まつてるゆゑ僕と二人で先づ初めやう、と椀の蓋にて仰ぎはじめぬ。亭婢の呆れ張李の驚く顏をじろりと横に睨みて豪傑ぶりたる我と後得、面を蓋ふばかりのものに春の湖ほど滿〻と注がせしを一杯一杯又一杯と、さも得意に重ね飲みしが、流石に終りの一杯を傾けて乾す頃ほひには腔中ほとんど火の如くなり、眼より炎焰も出かねぬ心地しけれど、後得はいざ知らず我はことさら泰然たる風を粧ひ、柱に凭りて身を反らし、小杯を取り飲みはじめぬ。

此地は別に見るところも無いといへば興は一席二席の酒の談論笑語に盡きたといふもの、何と明日は此地を出て那處を的といふは無くともぶら〳〵旅をしては如何だ、異つた土地に異つた下物で飲むだら同じ惡酒でも少しは可笑く醉はすだろう、後得子是非出かけ玉へ、正月二日姫はじめ好しとばかりは極るまい、四人男の旅行はじめも中〻思はぬ興があろうとの我が發言に、後得野暮を云ふ「がら」で無く、オット合點好かろ〳〵とゲット飲み干し、ツイと差しぬ。いよ〳〵明日の相談定まり、兎に角足利學校を一覽と出掛くるに決し、猶さま〴〵それよりそれと見物の次第など語り合ふ中、我と後得とは醉痛く發して席にも得堪へぬまで心地苦しくなり、舌の動きもあやしく眼の視ることも覺束なくなれば、亭婢等は其言ひざま視ざまのをかしとてか何かにつけて笑ひ罵り、李張二人も介抱するやうにはもてなせど私かに悅べる色あり。さては鋏心流の酒令などと我を欺きて大醉の憂き目を見せつるよ、然樣とは悟らず口惜くも淺き謀計に乘せられしかと、怒りて物言へど呂律たしかならで涎のみ口角に溜れば、亭婢等はま

すます笑ひ李山張水も遂に笑ひ出すに、其忌々しさ云ふばかり無けれど、足も危ふければ立ちも上らで猶泰然と坐り居つ、李張二人のさも美味げに飯を喫するを見ながら、飯も得食はで我は其まゝ倒れたり。

夜ふけて眼覺め見れば、何時舁き込まれしにや臥床に身は横たはり居たり。人々は鼾の聲のみさせて快げに睡れるが、遙に離れたる室にて亭婢の何事の過失して責めらるゝにや泣聲になりて罪を謝するに打交ぜて、何物をもてかひたひたと身を撲つ音聞ゆ。一月一日にはあり夜は深くあり、餘りのことなれば其所にいたりて何とか言はんとは思ひしも、由無き嘴を容れて何事か我が肩に落ちかゝり來んとき退きもならざるやうの場合にならば妙ならず、且は我さへ先刻には好ましからず思ひし女なればと、其まゝにして又睡りにつかんとせしが、流石に直には睡りかねて曉天近き頃辛くも夢に入りぬ。

一月二日、いざ出立といふに臨みて後得子は洋服に新調の美しき外套を被たる草鞋穿きの姿甲斐々々しけれど、我等三人は或は赤脚に或はメリヤス股引に草鞋穿きて裾高く端折りたるさま餘程馬鹿氣て見えたり。されど誰しも剛情我慢の男なれば反身になつて市を出外づれけるが、李山一人後れたるを何ぞと見れば、結びしこと無き草鞋の紐を今日初めて結びしなるより早くも解けて足に纏はるを、路傍に腰を屈めて結び直し居るなり。オイ〳〵李山、君は今年幾歳だ、草鞋の紐が結べないかネ。ひやかし玉ふな、今度は大丈夫、と云ふ間もあらせず一町ばかり歩むと又直解けたり。ソレ又解けた、紐が後に下つて居る。イヤナニ今度こそは大丈夫だ。ヤア又解けたでは無いか。エ、大きに御世話だ、これなら屹度好い。ヤア紐は解けないが君の流義では草鞋を横に穿くのか、踵が地を踏んで居るは、と三度四度笑はれて李山大きに弱りしが、少時して不圖又李山の見えざるに、例の草鞋がまた解けたかと笑つて一同後を見れば、遙の後にて百姓らしき一人の男と路の傍に何をするや屈み居るに、オヤ〳〵李山め此地らに叔父樣も持つまいに何を長く話して居るのか、と云ふ間も無く此方へ一直線に韋駄天そこ退けと走り來りて足踏み伸ばし、サア見玉へ此草鞋を、今度こそは大丈夫だ、先刻から君等に笑はれたが實は僕やんごと無き生れだから草鞋の結びやうなどは知らぬサ、然し君等に尋ぬる時は嘲笑ばかりで敎へては呉れぬと見たゆゑ少しも賴まず、今彼所にて柔和さうな老夫を見かけて張良が黄石公に對する如く慇懃に草鞋の紐の結びやうを尋ねたところ、二度三度はかうしてあゝしてと口で敎へて呉れたが僕がまご〳〵して居るのを見かねて自ら結んで呉れた、彼奴はもとより善人だが是れ一つには則ち僕の相貌堂々威風凜々、天晴英雄豪傑と彼奴等の俗眼にも見えたからだ、どうだ君等も恐れ入つたか、明治の張良は黄石公に草鞋を結ばせるッサ、と威張り返りて喋々語るを、後得くす〳〵笑ひ出して、ナアニ君、あの爺は君を馬あしらひにしたのだろうッ。

大の字山も見ては左までならず、足利學校も我等の感を惹くに足らず、古い本を見たとて高慢の料にもならねば、其門前の日當りよき地の梅の早咲二三輪を賞して足利を出拔け、サアこれから何處へ行かう、桐生へ行かうか、それ宜かろうと桐生へと心ざして日の暮に着きぬ。名高き機織場ほどありて町中を流るゝ小溝の水の力假りて水車を裝置したる家極めて多く、水車かけぬ家は却つて少きまでなり。今日は二日の初荷とて駄馬に紅白の長き縮緬乃至木綿の色美はしきを幾條と無く懸け飾りたるを曳くもの多く、馬こそ心は無かるべけれ鈴の音ちやら〳〵と床しく響き、綠の松立ち注連張れる門邊に風そよ吹きて紅白の其飾りの靡へるさま、繪にしても看るべく風情あり。旅宿に着きておもて二階に通り、酒酌み交はして一日の勞を休めけるに、酒やゝ發して耳熱する頃、樓下の路上に人の數行く氣はひしてチ、チボーンと東京にて「こわいろつかひ」の用ふる銅鑼の響きしければ、繁昌の土地なるゆゑ田舍なれども「こわいろつかひ」の正月の賑はしさに乘じて市を歩くならんと早くも推して、まぜつかへす積りの聲高く成田屋ァと我等の一人の云はんとせしが、其時遲く此時早く他の一人が窓の障子をサラリと開けしに、假聲使ひと思ひのほか葬禮なりしに叫聲の後半だけを呑み込みし其をかしさには皆噴飯しける。

一月三日、朝早く起き出でたれど那處に行くべき的も無し。さりとて歸らん所存も無ければ

大間〻へと假に定めて、九時頃渡良瀬川を越え晝少し前大間〻に着きぬ。桐生とは違ひて市も淋しく家並びも劣れりなど評しながら、警鐘の高く懸れる梯子の立てる近くに、羽毛美はしき種〻の鳥獸を剝製にしたるを吊し下げて賣れる家の眼につきしまゝ皆其家の前に佇みしが、生肉をも賣るらしき樣子なれば我突と入りて兎の肉を買はんとしけるに、獵師か然らずば博徒ならむと思はるゝ身幹大に眼圓き逞しき主人とおぼしき男朗らかなる聲して、兎は無いと答へたり。張水はまた吊したる鼯鼠を指さして、これは何といふものぞと問ひけるに、「もゝんぐわー」だ、と一聲に答へられ身を縮まして我と共に退きける。其勢の當り難きに李山も問答せざりしが、世馴れたる後得は流石に驚かで剝製の價高く賣るゝことより鴛鴦の山でも獲らるゝことなんどまで聞き出だし、煙草の火を假り床几に腰を掛けさも親しげに話しこみて、此あたりの山水の眺望佳きところをすら悠〻と問ひかけければ、我も少しく嘴を容れて、今來た途中渡良瀬川の景色は隨分好かつたが彼より眺望好いところが近くにあるなら教へて呉れ、と云ひ出すに主人は大口開いて笑ひ、あんなものを好い景色と云ふやうでは仕方が無い、地藏峠に行つて見なさい、あんなものとは雲天ばんてん、すッばらしいのに驚くだろう、との答へ如何にも語氣たしかに眞實らしければ、我を初め殘る三人も釣り込まれて乘り地になり、それなら其處を一覽したいが其處より今日の暮れぬ中に前橋までは行かれやうか、また其處までは那の路を那の方向に取つて行けばよいのか一〻教へて呉れ、と眞顏になつて尋ぬるに、阮小五とでも云ふべき主人は反り身になつて煙管を打振り、先づ辨當を腰にして此處より上へ少し行けば戌亥の方へ折れる小徑のあるを辿りて行き、それより後は横へ折れゝば花輪か又は棚澤なんどと云ふ村へ行くばかりなる故、たゞ何處までも眞直に上り上りと心掛けさへすると直に地藏峠、それから前橋へは下りの路ゆゑ五里や六里は一ト走り、日暮までには容易のことだ、と手に取るやうな挨拶なり。よし〳〵、それなら我等四人、一番互ひの足だめしに地藏峠を駈け上りて直ちに駈け下り、前橋の旅亭で美味い下物に美味い酒、充分愉快に飲まうでは無いか、との發議たちまち採用されて、面倒のついでに掬飯までを主人に賴み、各自それを腰にして意氣揚〻と鬼が嶋征伐にでも出掛くるやうに立出でたり。

戌亥の方に折るゝ小徑を認めて大間〻を後になし段〻進み行きけるが、雪もよひの曇り空どんよりとして、風は無けれど人家離れし茫〻たる原中を歩むなれば自然と餘計に裙寒き心地し、一里半ほど過ぎし頃には皆〻の顏青ざめたり。されど一小村を過ぎて寺は見えねど墓地とおぼしき石塔率塔婆の數立てるところにさしかゝりて、不圖數多き石塔中に大德利の上に大酒盃を伏せたる形を石もて造りて亡き人の標記となしあるものを見出せし時は、多分これは亡者の遺言かなんどで造りしならんが如何に酒好きなればとて餘りをかしい注文ならずや、これでは子孫が墓參しても馬鹿〻〻しくて可笑くなるべし、まだしも下戸で牡丹餅を竹の籜に包んだ形を遺されぬだけがよかるべきが流石に田舍の人の仕事と皆〻笑ひ評しなどしつ、大きにショゲたる氣を勵まして又進むに、次第〻〻山深くなればや路は狹く風は冷やかなる處に出で、いと大きなる山の脊に馬の鬣などの如く松の並樹の生へるを望みて覺束無くも辿りたり。

三時過ぎと覺しき頃になりても彼の剝製屋の主人の云ひたる沼あるところにも出でず、地藏峠と思はるゝ峰にも出でず、たゞ松の樹の馬鬣の如く其脊に生ひたる大山ばかりは我等が眼の前に姿も變へず巍然と立てど、呼びて答ふる者にもあらねば心細さを增すのみにて、路をば尋ね地藏峠を那方と尋ねんにも行き逢ふ人の全く無きに如何ともせん方無く、どうも路に迷つたやうだ。左樣さ、どうも怪しくなつたね、一體始終眼の前に屹として居る彼の山は何といふ山だろう。あれが地藏峠では無いか。さればさ、僕も先刻から多分地藏はあれでは無いかと思つて居るが、若しもあれなら大變だ、今でさへ充分草臥れて居るに此上猶彼の山まで上らせられては死んで仕舞ふ。死んで仕舞ふなんぞとケチなことを云つては困る、勇氣が沮喪して仕舞ふではないか。君が困ると云はないでも勇氣は疾に沮喪して仕舞つて居る。ヱ、馬鹿な、弱いことを云ひ玉ふな。ト云ふ君が跛足を引いて居るのはどうだ。そんなことを此處で論じても役に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com